前へ

第三話

「前へ！」　第三話

當眞嗣朗

そうは言っても、余裕の表情でいられるわけでは、もちろんなかった。

Ａの書いた小説が単行本の体裁となって書店の店頭に並びはじめた時、Ａはじゃっかん胸を躍らせる気持ちで、書店を訪れた。街から街へ、逸る気持ちをなんとか抑えながら自動車を走らせ、書店があるのを見つけると、片っ端から入店し、棚を覗いてまわった。他人の振りをして。青い表紙のその本は、地元の出版物を専門に陳列した棚の平台に、他の多くの刊行物と一緒に、表紙を表にした状態で並べられていた。たいていの書店では、五冊を目安に仕入れられているようだった。帯には客の目を惹くようなコピーが印刷され、編集部お手製の販売促進のポップが立てられてあった。初版部数がそれほど多くはなかったが、Ａの目にする限り、多くの書店に配本されているように見えた。自分の本の隣には、有名な文学賞を受賞した経歴を持つ作家の新作が並べられていた。それを眺めているだけで、Ａは興奮を抑えきれない気持ちになった。

それでもＡは残念ながらその日、自分が書店の店内に留まっている間に、その本が見ず知らずの誰かの手に取られて、レジへと運ばれていく様子を見ることは出来なかった。なんらかの磁力が客

の関心を一心に惹きつけ、その本を手に取らせるという様子を見ることさえなかった。休日の感触を三日分ばかり忘却した平日の書店の店内は、日がまだ高い位置にあるせいもあって、閑散としていた。それなりに客の姿はあったが、書店員たちは全員暇そうで、それぞれに与えられた役割を無難にこなしていた。店内放送は派手な装飾をいっさい剥ぎ取ったといった具合のインストゥルメンタルで、眠気を誘うリズムを淡々と刻んでいた。たいていの子供は学業に勤しんでいる時間だ。客の大半は、買い物途中の主婦や老人、そして暇な時間がもっとも充実しているとでも言うような感じの若者たちだった。彼らはそれぞれに興味を惹かれている分野の棚を静かに物色していて、その視線が必ずしも地元の刊行物の棚へと向けられているわけではなかった。そこになにかがあると考えているのは主に、年配のヒトか、少しだけ探求心に溢れたような顔つきをしている中年の男女だった。人生初の本が刊行された直後の店内の様子がこうも長閑だと、少しだけ拍子抜けした気持ちにもなった。

そんなある日、一向に進展しない事態にAが頭を抱えていると（それは通常業務のようなものだった）突然、携帯電話の着信音が鳴った。机の上に放り出してあった携帯電話を陰鬱な動作で取り、画面を覗くと、そこには、見慣れた出版社の名前とその電話番号が表示されていた。それを見た瞬間、

心臓が盛大に鼓動を打った。脇の下に汗が滲んだ。慌てて通話ボタンを押すと、久方ぶりに担当編集者の声が聞こえてきた。彼は儀礼的な挨拶の言葉を終えると、じゃっかん上擦った声でこう言った。

「例のアレ、どうやら落ち着かない状況になってきたようです」

落ち着かない状況？

Aは、担当編集者から（嬉々とした声で）詳しい事情を説明された。その結果、目の前に見える景色が急激に、異世界を取り込んで一体化したのを感じた。

つまり、すっかり仰天してしまうことになったのだ。

きっかけは、じつに驚くべきものだった。

ニューヨークを拠点に活動している世界的に有名な女性ファッションモデル（日本でも圧倒的な人気を誇っているらしい）が、仕事で滞在していたホテルから、恋人（こちらも有名な男性ファッションモデル）と仲良く抱き合いながら出てきたところを、待ち構えていた新聞記者にスクープされたのだ。そしてなんと言うべきか、その国際的な人気者はその手に、Aが出版した本を持っていたのである！

書名まではっきりと鮮明に写り込んだその写真

はまず、ニューヨークタイムスの日曜版に大きく掲載された。「結婚間近！」という大見出しで記されたその記事はその後すぐ、世界各国の新聞に転載された。そしてそのスクープ記事は、世界じゅうの人々の目に触れ、話題にのぼった。人々は盛んにその記事について噂しあった。そうして報道が過熱すると、テレビ局までがこの話題を取り上げ、ニュース番組で特集を組み、この写真を何度もくりかえし画面に映し出したのだ。

やがて、その恋人との結婚を来月に控えていることを記者に明かしたその人気女性モデルが、そのきっかけとして口にしたことが世界じゅうを駆け巡った。彼女は幸福感に満ちた穏やかな表情で、こう言ったらしいのだ。「わたしが大好きなこの小説を、偶然彼も読んでいて、お互いにこの小説の大ファンだったことが判ったの。それでわたしたち、理想のカップルになれると判ったのよ」。その結果、当然のことながら、世界地図の隅っこにあるアジアの小国のさらに地方に住む無名の男性が自費を投じて出版したその本は、瞬く間に世界じゅうの人々の熱烈な視線を浴びることになったのだ！

国籍や人種を問わず、世界じゅうで多くの人々が、その話題をＳＮＳで取り上げた。ツイッターでリツイートを繰り返し、フェイス・ブックで拡散した。その本が日本語でのみ出版されていることを残念がった多くの外国人たちが、すぐに自国語に

翻訳するように、と地元の出版社に熱いラブコールを送っていた。

いやはや、なんということだ！

Aはその話を聞かされて、頭がポカンとしてしまった。脳がいっさいの電気信号を拒絶し、思考することを止めてしまったような気がした。自分の耳が存在意義を失い、すべての音に対して無反応を決め込んだかのようだった。身体の内側に確かにあったはずの臓物が、一気に大気中に溶けて消えてしまったかのようにも感じられた。「本当ですか？」「嬉しい！」。そんな言葉はどこにも存在しなかった。否定も肯定もなかった。Aの身体の内側に残されていた唯一確かな言葉は、「どうして？」という強力な問いだったのだ。

果たして、どうしてそんな突拍子もない出来事が、Aの身の上に生じたのだろうか？　そもそも何故、その世界的に有名な女性ファッションモデルは、沖縄の小出版社から著者が自費を投じて少部数で出版した本を、手に取ることが出来たのだろうか？　そして何故、外国語（この場合、英語）に翻訳されていない日本語で記された小説を、彼女（または、彼女の恋人）は読むことが出来たのだろうか？

どれだけ巧みに思考を巡らせても、Aにはまったく理解の出来ない事態が、目の前であまりにも

大胆に生じていた（考えられるのは、在日米軍基地内にある書店から購入されたということ、だが）。Aはそこに驚嘆以上の感情を感じて、動転した。自分の両親がある日突然、地球外生物だったと発覚した！　そんな誰でも判るデタラメが一定のリアリティを持つような、そんな奇想天外さがそこにはあった。アクシデントは結局、本人のまったく預かり知らない場所から唐突にやってくるのだ。もっとも今や世界は、インターネットによって密接に繋がりあっている。すべての情報は、通信ケーブルを通じて、世界じゅうで共有されているのだ。どこで、どんな奇跡が起きても不思議ではない。

しかし、それにしても！

その結果、Aの出版した本は、信じがたいほどの猛烈な勢いで売れ始めた。すでに書店の店頭に並べられてあった納品分は、獰猛な肉食獣の飢えを表す前衛的なアート作品のように、棚から強引に引きちぎられるようにして売れてしまった。書店員も前代未聞のこの事態に、ひたすら困惑している様子だった。一体なにが起きているのだ！　これはもう事件だ、と。客からの問い合わせが相次ぎ、営業が麻痺状態に陥ってからはじめて、とんでもない事態が勃発したことに気付いたという。彼らはすぐに、出版社へと電話した。追加分をすぐに持ってきてください！

同様の電話は日本全国から休む間もなく押し寄

せた。まるで大地震が巨大な津波を生み、それが世界を瞬く間に呑み尽くしていくかのように！　出版社の職員たちは通常業務を放り出して、総出でその対応に当たらざるを得なくなった。電話は一瞬たりとも鳴りやまなかった。中には、その出版社を直接訪ねてくるヒトまでいたという。

それらの問い合わせは、インターネット回線を通じて海外からも数万件あった。それには語学の達者な職員が手分けして対応に当たった。しかしその中には聞いたこともない言語での問い合わせが複数件あり、それにはパソコンの翻訳ソフトも対応出来なかった。世界各国の出版社からは翻訳権を買いたいという相談が続々と持ち込まれ、ハリウッドからは映画化の権利を売ってもらいたいという申し出までがあった。

これはもう、超常現象レベルの事件だ！

当然、用意してあった在庫は、あっという間に売り切れとなった。出版社はすぐに大幅な増刷をかけた。その費用は、出版社が全額負担することになった。印刷会社は連日徹夜の作業に当たった。印刷機は休みなく稼働し、それにも限界があったため、出版社は電子書籍版も急きょ、用意することになった。こんなことは前代未聞ですよ！　担当編集者は言った。沖縄の出版業界の歴史でも前例のない快挙ということらしかった。すぐに新聞社が取

材にやってきた。Aはじゃっかんの戸惑いを覚えながらも、こう答えた。

「ぼくはマジックを使えるんです。しかし今回ばかりは、効き目が大きすぎたようです。世界じゅうを虜にしてしまった！」

その数日後、奇跡的な成功のお祝いと称して、家族を高級なレストランに招待したAは、彼らにこう言われた。

「わたしたちはね、もうこれ以上を望まないよ。キミはじゅうぶんに頑張った。長年の努力と苦労が認められたんだ。そのおかげでわたしたちは、こんなに美味しいワインを飲むことが出来た。だからと言って、いつまでもこれを愉しんでいるわけにはいかない。もう、贅沢な時間は過ぎた。後は高級なものでなくとも良いんだ。冷凍食品のピザだっていいくらいだよ。わたしたちにとっては、キミの成長こそが、なによりのご馳走なんだからね。そして最高のテーブルとは、こんなに金のかかった気取ったものじゃない。日常だよ。それこそがわたしたちの原点であり、もっとも望ましいテーブルなんだ」

その言葉を聞いて、Aは安堵感が静かに全身を包み込んでいくのを感じた。ずいぶんと無理をして背伸びをしていた状態から身体が解放され、ようやく地面に足が着いている感覚がもどってきた。

それからAは、改めて実感した。彼らこそが、ぼくの血を分けた家族なのだ！

じつはAは本来、必要以上の贅沢を嫌う傾向を持っていた。Aが潤沢にお金を使うのは決まって、書物だった。本を読むことに支払うお金は、大きな負担だとは感じなかった。もちろん書店の店頭で高価な専門書を手に取ると、購入するべきかどうか？　ずいぶんと頭を悩ませることになった。しかしそれでも原則的に、書物に支払うお金を出し惜しみすることはなかった。それが、未来の自分にたいするもっとも有効的な投資だと認識していたからだ。それはブーメランのような軌道で、利益をAにもたらしてくれる。その反面、それ以外のものには、徹底的にケチになれた。食事に必要以上のお金をかけることを、Aは嫌った。衣類も同様だった。住まう家も、乗る車も、自分の決めた適度さの範疇を超えてしまうと、すぐに不快に感じられた。だからこそAの生活は、一定の快適さに満ちていたのだ。

どうやら家族も、同様の意見を持っているらしい！

Aは自分が、一定程度の成功を治めた理由を、そこに見い出すことが出来た。つねに謙虚な心を持ち、けっして向上心をうしなわない。熱心に勉学に励み、努力を忘れない。同時に胸にゆとりを持ち、

けっして焦らない。他人の幸福を、自分の幸福と同一視する。そして、他者に惜しみなく愛を注ぐこと。

まさにそれこそが、後の利益へと繋がるのだ。それは、Ａが経験的に学んだ成功哲学だった。

それから数日後の午後、Ａが自宅で一人、コンピューターに向かい、つぎの作品の執筆に取り組んでいると、郵便配達人が訪ねてきて、郵便ポストには入らないからと言って、やけに厚みがあり重量感のある大きな封筒を直接、手渡して去っていった。宛先はＡで、送り主は、Ａの本の出版を引き受けてくれた那覇市内の出版社だった。さっそく開封して中を確かめると、そこには出版社宛てに寄せられた大量のメールをプリントアウトしたものが束ねられて収められてあった。どうやらそれは、Ａの出版した本に対する読者からの感想のようだった。

つづく